

## 第十一回 長崎街道木屋瀬宿



江戸の宿場の面影を残す木屋瀬宿

オランダ商館長の江戸参府に随ったシーボルトがここで駕籠(かご)を降り、画家司馬江漢は傍を流れる遠賀川の自然をめで、ベトナムの象も巨体を休めた。その姿が今も思い浮かぶ八幡西区の木屋瀬宿。人々はその街並み、自然、歴史に心を癒す。

木屋瀬は小倉と長崎を結ぶ長崎街道の宿場で旧福岡藩内筑前六宿(黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、原田)の一つ。水上裕・木屋瀬みちの郷土史料保存会長によると、平安時

### 戦国期を 思わせる宿場

宿は、「く」の字型の街路

代や室町期の古文書にも「木夜」「木屋瀬津」などの地名が記されている。遠賀川を渡って赤間に至る道との分岐点で、江戸時代初頭の慶長十七年(一六一二)ごろ内野と山家を結ぶ冷水峠越えの道が開かれて以降、宿駅として発達。その後、大名の参勤交代の制度化により、さらに整備が進んだとみられる。

約900坪の両側に形成されていた。参勤交代途上の大名、長崎奉行らが宿泊した本陣「御茶屋」、オランダ人や付添役、町年寄りらの脇本陣「町茶屋」、地元役人らの会合場所「郡屋」、代官所、旅籠などが軒を連ね、「木屋瀬風土記」という江戸後期の書では戸数400、人口1290人がいたという。

特徴的なのは、通りに面する建物が道と平行ではなく、のこぎり歯状に斜めに構えて建っていること。「矢止め」と呼ばれ、敵が攻めてきた時、そのくぼみに潜んで敵の不意を打つための工夫という。通りと直角に交わる狭い道もあるが、その先は寺などで行き止まり。まるで城郭を思わせ、戦乱の世の記憶がまだ生々しい時代の宿場造りだったことがうかがえる。

### 江戸期の文化 今もなお

明治四〇年、日本陣周辺から出火、町の大半が焼けた。貴重な文物の多くも消失したが、案内ボランティアも務める本町町内会長高野義仁さん

(67)によると、村庄屋、船庄屋、ろう製造元などの古民家が随所に残り、現在も市民の生活の場。大名列の供奴のしぐさ、掛け声などを入れた盆踊り、祇園祭、子供えびすなど江戸時代からの民俗行事も連綿と続いており、「これらを次代にバトンタッチするまできちんと整備しておくことが我々の務めです」と言う。

行政も白壁などの旧家整備を助成する建築協定を設け、旧本陣跡には平成十三年一月、木屋瀬宿記念館を開設した。運営するのはまちづくり協議会、自治会、商工連盟など地元8団体。高巢良平館長(63)は「開設・運営とも地元の熱意と協力のおかげ。さらに魅力的な宿にするために共に努力したい」と話している。

シニアスタッフ村田和夫



宿の端に残る西構口